九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# ワーヅワースとディヴィド・ハートレーの哲学(上)

前川, 俊一

https://doi.org/10.15017/2332851

出版情報：文學研究. 57, pp.9-30, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

# ワーヅワースとデイヴィド・ハートレーの哲学(1)(上)

前川俊一

マシュー・アーノルドがゴウルドン・トレヂュリー双書のワーヅワース詩選を編むにあたつて執筆した序文は、ワーヅワースを論じて、エリザベス朝以後、シェイクスピア、ミルトンに次ぐ詩人と断じた、頗る含蓄に富む一文であつた。しかしこの中で「彼の詩が真実であり、彼の哲学は少くとも「科学的な思想の体系」の外形と衣裳をまとふ限り、またまとへばそれだけ一層に虚妄である。恐らく、他日我々はこの提言を一般化して、詩は真実であり、哲学は虚妄である、と云ふやうになるであらう。」と断言したことは、この詩選の編集方針と相まつて、その後のワーヅワース批評の上に強い暗示を投げかけることになつた。これは、序文の執筆当時、所謂ワーヅワーシアンズによつて、ワーヅワースがあまりに予言者視されさうな傾向に対する解毒剤としての意味を持つてゐたであらう。また、哲学は虚妄、詩が真実といふ一般的な提言は、それ自体として意味深い問題を提示するものであらう。しかしアーノルドのこの言葉があつて以来、批評家の間では、はじめからワーヅワースの思想乃至哲学を疎外してかかり、彼の詩をさういふ問題ときり離して、考へ、味はうとする傾向が有力になつて来た。これはワーヅワースの詩の正しい理解と評価のためには、必ずしも望ましいことではなかつたやうに思はれる。

少くともワーヅワース自身は、自分の詩に対するこのやうな近づき方に大きな不満を持つたであらう。彼によれば、詩人とは「人並すぐれて活々とした感受性と、熱誠と、情愛のこまやかさを具へ、人間性についてのより大いなる知識と、より包擁的な魂を持つた人間」なのであり、その生み出す詩は「あらゆる知識の息吹であり、より精妙なる精神」であり、「あらゆる知識の最初にして最後なるもの」また「あらゆる書きもののうち、最も哲学的なるもの」であつて、科学や哲学や人生智と無関係である筈はないのである。

もつとも、アーノルドが先きの断言の中で哲学と云つてゐるものは、「科学的な思想の体系」の衣裳をまとつたものを指すのであつて、「あらゆる知識の息吹であり、より精妙な精神」とワーヅワースが云つてゐるものとはたちのちがつたものだ、といふ異論が出るかも知れない。しかしワーヅワースの詩は一体どの程度に「科学的な思想の体系」のころもをまとつてゐるであらうか。また、まとつてゐるとして、それはワーヅワースの所謂「哲学」又は詩と果してきり離して考へ得られるものであらうか。ワ

ーズワースは云ふ、「いやしくも何かの価値を持つた詩は……生れつき人並以上の感受性をそなへながら、しかも長く、深く考へた人によつてはじめて作り出されるものである」と。ワーズワース自身の成熟期に書いた作品の殆んどすべては、「長く深く考へた」成果として生み出されたものであつた。長く深い冥想の過程によつて達成された、コウルリッヂの所謂「深い感情と深遠な思想の合体」こそはワーズワースの詩に見られる顕著な特色である。アーノルドが「科学的な思想の体系」と云つてゐるのは一体何を指すのであらうか。若しそれが、レズリー・スティーヴンがワーズワースの詩から抽出したやうな思想の体系(2)を意味するものとすれば、それはワーズワースの詩とは相当の緊密さで結びついてゐるものではあるまいか。

ワーズワースが彼独自の作品を書き出すやうになつたのは、一度は「道徳的絶望」の淵に陥つた彼が、従来の彼の思想を放棄して、全く新たな観点から、自然と、社会と、人間を見るやうになつたことが、その根本の動機をなしてゐる。しかも、そのやうな自然観、社会観は、いままで彼に体験されながら自覚されず、従つて彼の詩作には姿を現はさなかつたワーズワース独自の深い神秘的体験に反省の目を向けることによつて、はじめて形づくられた。彼の詩への開眼は、かう云つた、体験と反省との緊密な連関のうちに達成されたのである。かういふ事情から云つても、ワーズワースの思想と詩とは簡単に切離して考へられるものでなく、この二者を別個に考へようとする試みは、ワーズワースのうはすべりな理解に導く危険があると云へるであろう。

しかし、ワーズワース如何に独創的な天才とは云へ、その思想や詩が、何の背景もないところに、突如生れる筈はない。そこにはさういふものが、彼を通じて姿をあらはすべき、伝統的、時代的な思想的基盤が当然に予想される。彼の思想と、その形成に寄与したいろんな外的要素との関係を検討することは、彼の詩と思想の持つ意義を考へる上に、是非必要なことであらう。ワーズワースは己れの天分を信じる念が強く、容易に他人のものを受入れない、かたくなな性質であつたといふのが、晩年、彼に会つたものの受ける印象であつた。しかし彼がはじめて彼の詩らしい詩を書き出した一七九七年は、彼もまだ廿七才の多感な青年であつて、それまでの数年間、当時の全ヨーロッパ的な烈しい社会的、思想的混乱に若い魂をゆすぶられ、その思想も、フランス革命思想、ゴドウイン主義と、当時流行の思想に強い影響を受けながら、大きな振幅を画いて動いてゐるのである。しかし、彼が独特の詩境を開拓し、またそれを支へる彼独自の思想を形成するに当つて、自分の生きてゐた時代、又は過去の伝統から果してどういふ思想を受入れ、またそれをどんな風に消化して行つたかとなると、問題は仲々複雑である。

ワーズワースの云はば思想的系譜と云つたものを定めるについては、大体次の四つの観点が考へられるであらう。

その一は、ワーズワースを当時の欧州全体を風靡してゐたロマンティシズムの思潮のうちにとらへて、彼の思想は、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等によつて代表されるドイツ先験哲学の傾向に一致すると主張する見解である。この見方をとる代表的な学者はA・C・ブラドレーであらう。ブラドレーに従へば、ワーズワースの時代に生きた英詩人達は、自国の哲学者達と

の思想的類縁性を示すこと極めて稀薄であつて、彼等は自国の哲学者達をさし措いて、遠く当時のドイツ哲学者達をとりまくと同じ雰囲気と精神のうちに息づいてゐたといふのである。ブラドレーはかう云つた観点から、ワーヅワースの思想とヘーゲルの思想を比較し、両者の間に一致する点の多いことを指摘してゐる。(3)

その二は、ワーヅワースの思想を同じくロマンティシズムの思潮のうちに包括されると見ながらも、それをむしろルッソーの考へ、あるひはルッソーを根元とする「自然への復帰」の考への流れのうちに位置づけようとする見解である。フランスのエミール・ルグイ、米国のG・M・ハーパー、更にアーヴイング・バビットと云つた学者はこの見地に立つものであらう。たとへばルグイは、全欧洲的な観点からするとき、ワーヅワースの思想はルッソー主義の英国的変種と見られるものであつて、只そのある部分に、これと正反対の考へ方に立つエドマンド・バークによる補正を加へたものであると見てゐる(4)。ワーヅワースの伝記作者G・M・ハーパーは、ルグイとは異つた立場からではあるが、ワーヅワースとルッソーとの間に余りにも符合するところの多い点を指摘して、これは恐らく偶然の一致ではなく、ワーヅワースがルッソーから非常に大きな影響を受けてゐるのであらうと推測してゐる(5)。バビットもワーヅワースのうちにルッソー的な原始主義を多分に認め、それがワーヅワースの評価の上に相当の重みをもつものであると主張する(6)。尤もバビットの場合、それがワーヅワースについての全面的真理であるとまでは云つてゐない。英国の学者C・H・ハーフォドもやはりワーヅワースを全欧州的な思潮のうちにとらへ、ルッソーやドイツのロマンティシズムの哲学と英国の詩との間に深い関連のあることを認めてゐるが、ワーヅワースを特にその育ちと環境の上から見て、生れながらのルッソー主義者と見る。この点、彼もやはりこの第二の見解に立つものと見てよからう(7)。ワーヅワースを生れながらのルッソー主義と見る点では、ウィリアム・ギャロドも同様である(8)。

第三は、ワーヅワースの思想をヂョン・ロック、バークレー、デイヴィド・ハートレー等の英国経験主義哲学の直系の子孫と見る見解であつて、その最も詳細で組織的な主張を展開してゐるのが、米国の学者アーサー・ビーティーである(9)。しかも彼は、この立場から、先きの第一及び第二の見解を強く排撃してゐる点に於て、極めて異色ある立場に立つものである。

近年「十八世紀の背景」を著はしたバジル・ウィリー教授は、ワーヅワースの思想を英国十八世紀に於ける「自然」思想の発展の頂点を形づくるものと見てゐる。それは、歴史的、発展的な見方からワーヅワースの思想をとらへてゐる点で、ビーティーの静的な見方といささか趣を異にするが、やはりこの見方の中に包括することが出来るであらう。

第四の観点は、ワーヅワースを、時空を超えて、いづこの土地、いづれの時代にも現はれ、根本的に常に同一の立場にあるミスティクであると見、この神秘主義がワーヅワースの場合、たまたま自然を媒介として現はれたと見る見解であつて、F・W・H・マイヤーズ(20)、C・F・E・スパーヂョン(11)、更には嘗てのロンドンのセント・ポール寺院のディーンであつたウィリアム・ラーフ・イングの見解がこれに属するであろう。

以上の四つの観点からするワーヅワースの思想の位置づけは、

必ずしも相矛盾するものでなく、恐らく互ひに補ひ合つてはじめてワーヅワースの思想の全貌をとらへ得るものであらう。只ここに問題になるのは、第一の見解を代表するA・C・ブラドレーと、第三の見解を代表するアーサー・ビーティーとは、まつたく相反する主張をしてゐることである。即ち、ブラドレーはワーヅワースの思想と英国のヂョン・ロック以来の経験主義哲学とのつながりは極めてうすいと主張するのに対して、ビーティーはワーヅワースの思想こそはヂョン・ロックからはじめてデイヴィド・ハートレーに至る経験主義哲学の直系の子孫であつて、独逸先験哲学とワーヅワースの思想との間にはブラドレーの主張するやうな類似関係も、また影響関係も全く見られないと主張してゐるのである。

ワーヅワースの思想をその全般に亙つて検討し、その正確な坐標をきめることは、この小論のよくするところではない。しかし問題の焦点をワーヅワースの思想と、英国経験主義哲学との関係にしぼつて、特にアーサー・ビーティーの主張するところを吟味しながら検討して行くならば、問題は自然に先きの四つの観点にも触れ、ワーヅワースと伝統的な思想や時代思潮との関係や、彼の思想の独自性について、ある程度の見透しが得られるのではあるまいか。以下そのやうな予想の下に、この問題を検討して見たい。

英国経験主義哲学の祖といはれるヂョン・ロックは、人間の心は始めは云はば文字を全然記してゐない白紙のやうなものであつて、それが観念を具へるやうになるのは経験によると考へ、デカルト以来の観念生得説を否定した。ロックによれば、経験には外界の感覚的対象に関係して吾人の感官が心に運び入れる知覚（即ち感覚）から生ずる観念と、更にはそのやうな観念に関して働く吾人の心の作用の知覚（即ち反省）から生ずる観念と、二種類ある。このやうにして、吾人が感覚及び反省によつて得る原始の観念は、分折して更に原始のものになし得ないといふので、ロックはこれを単純観念と呼んだ。さて、感覚にせよ、反省にせよ、それらが心に提供されるときは、吾人の悟性はそれを受取ることを拒むを得ず、またそれを変改するを得ない。それはあたかも、鏡の前に置かれた物体が鏡の中に生ぜしめる映象を鏡が拒否したり、変更又は抹殺することの出来ないのと同様である。この意味で、吾人の悟性は単純観念を受入れるに際しては受動的であると云へよう。しかしながら心は感覚又は反省によつて得た単純観念を結合又は比較することによつて、複合観念をつくり上げることが出来る。この場合には心は能動的に、その欲するままに己れの能力を行使出来るわけである。

ロックの考へは、更にヂョーヂ・バークレー及びデイヴィト・ヒュームによつて発展させられたが、ここにはヒュームについて考へて見たい。ヂョン・ロックの考へでは、感覚、知覚と観念との関係が曖昧であつたが、ヒュームは知覚を二種類に分ち、感官によつて吾人の心にはじめて入り来る感覚、感情の一切を印象と呼び、次にそれらの印象が記憶又は想像作用によつて吾人の心に再現するときの知覚を観念と呼んだ。観念は、それが吾人の心の中に生起するとき、欲求、嫌悪、又は恐怖と云つた新たなる印象を生む。これらの印象は観念から生れるものであるから、ヒュームはそれを先きの「感覚の印象」と区別して「反省の印象」と呼んだ。これらの印象が、更に記憶と想像作用によつて吾人の心の中に再現するとき、ここにまた観念が生れるわけである。ヒュー

ムの考へるところによれば、印象と觀念の間には何等質的な相違はなく、只それらの知覺が心を打つ強さと鮮明さに違ひがあるだけであつた。かくしてヒュームにあつては、第一次的な知覺、即ち印象と、第二次的な知覺、即ち觀念との相違は、量的なものに還元されてしまふ。さてヒュームは、印象が觀念として心に再現するときに、二つの仕方があると説く、一つは再現時に元の印象の鮮明さを多分に留めてゐて、云はば印象と觀念との中間段階にあるもの、他はその鮮明さを完全に消失してゐて、觀念になりきつてゐるものである。第一の仕方で印象を再現する能力を想像と呼ぶ。記憶による觀念と、第二の仕方で印象を再現する能力を記憶、想像による觀念との間には、力強さ、鮮明さ以外にも相違の点がある。即ち、どちらの觀念も、はじめそれに対応する印象がまず生起して觀念への道を開いてゐなければ心中に生起する余地はないのであるが、記憶による觀念は当初の印象のもつ秩序と形態を忠実に保つてゐるのに対して、想像による觀念は当初の印象の秩序と形態とに束縛されない。即ち想像は觀念を自由に変改する力を持つてゐる。かくしてあらゆる単純觀念は想像力によつて勝手に分離せられ、あるひは結合されるから、この種の能力の作用程説明しにくいものはない、と云ふことになりさうであるが、ヒュームによれば、この作用もある普遍的な原則に導かれて働いてゐる。このところでヒュームは觀念連合の法則なるものを持出して来る。即ち心の能力のうちで最も自由なものと認められてゐる想像作用でさへも、ヒュームの所謂、類似、近接、及び因果の三つの觀念連合の法則を受けるといふのである。曰く、「吾人の思考の過程に於て、吾人の觀念の不断の変転にあつて、吾人の想像は容易に或る觀念からそれに類似する觀念へと走り行くこと、またこの性質のみが空想に充分の紐帯と連合とを与へることは明瞭である（類似の法則）。同様にして、感覺はその対象を変へるに際して、それらを規則的に変へ、互ひに近接する対象を採上げるを余儀なくされるが、想像も長い習慣によつて同様の思考法を獲得し、事物を思推するに際して空間と時間の部分から部分へと走らざるを得ない（近接の法則）。また……事物と事物との間の因果関係程に空想裡に強い結合をつくり出し、これ程容易に一つの觀念をして他の觀念を呼び起させるものはない（因果の法則）。」(13)

もつともヒュームに従へば、この法則は、觀念の結合を厳に規制する「不可離の連結」と考へるべきでなく、「普通は優勢であるところの温和な力」とでも形容すべきものなのである。兎も角彼は、かうした觀念連合の法則なるものを導入して、単純感覺が結合して複合感覺をつくり上げたり、あるひは或る觀念の生起が他の觀念の生起をうながす現象の説明を試みてゐるのである。かう云つたヒュームの考へにあつて顕著に認められることは、一切の觀念の起源を感覺に求めることに於て彼もまた経験主義的なロックの考へを受け継いでゐるが、ロックの場合にまだ認められてゐた心の能動性を出来るだけ制限し、心理現象を出来るだけ受動的、機械的に説明しようといふ傾向が見られることである。

ヒュームの觀念連合の説は更にディヴィド・ハートレーに受け継がれ、発展させられて、人間の心理の全体を規制する根本的な法則となつた。

ハートレーは觀念の成立を論ずるに、生理的な説明から出発し

た。彼によれば、外界の事物が人間の神経や脳の中の髄性極微物質に振動を与へた場合に生起するのが感覚である。随つて感覚とは外界の事物が吾人の心に印刻するものであるが、同一の感覚が幾度か繰返して心に印刻されると、遂にはそれは心にその痕を残し、そのため長い時間を経た後でも、その当初の感覚に似たものを心の中に生起させることが出来るやうになる。それがハートレーの所謂「感覚の観念」である。ハートレーはこれにも生理的な説明を与へて、外界の事物が脳中の髄性極微物質に惹起させる同一の振動が幾度か繰返された場合に、遂に件の極微物質に先きの振動に似て更に小規模の振動が生起するやうになる、その小規模振動に対応して生起するものが感覚の観念なのである、と説いてゐる。かう云つた感覚の観念は一般に単純観念と呼んでよいものであるがこれらの単純観念は観念連合の法則によつて結び合はされて複合観念を生む。ハートレーはこの複合観念の生起の経過にも生理的説明を与へて、それは数個の感覚の同時生起又は継続生起に対応する脳中の極微物質の複合的な振動が幾度か繰返された結果生ずるところの件の極微物質の複合的な小規模振動のもたらすものであると説明してゐる。かくしてハートレーの説明はヒュームのそれにくらべると更に徹底して受動的、機械的である。但しハートレーによればかくして生じた複合観念は、それを構成する単純観念の数が余りに多いときは、一見件の構成要素に何の関連もないかのやうな観を呈する。それは箇々の単純観念は結合されるや否や、その結合の総体に圧倒されてしまふからである。それは、調合された医薬が、さまざまの味と香をもつた数種の成分から成つてゐるにもかかはらず、その全体として生み出す複雑な味と香が元の味と香を抹殺し、圧倒し去ると同じことだといふのである(14)。

ハートレーはまた、感覚的な快楽や感覚的な苦痛も感覚の一種であるが、快感と苦痛との違ひは質的なものでなくて量的なものであり、苦痛は限度を越えた快感であると説明してゐる。そしてこれらの感覚的な快感や苦痛も、やはり観念連合の法則にしたがつて、次第にそれ自体は感覚的な快楽や苦痛をともなはない観念に移行して、ここに智的快楽と智的苦痛とを生み出す。ところが吾人の日常経験する感覚的快楽は感覚的苦痛にくらべて遙に多量であるから、これらの快楽や苦痛が互ひに入交り合つて複雑な移行の過程をとる間に、苦痛の部分は次第に減少、消失し、結局に於て純粋の智的快楽を生む率が圧到的に高い(15)。観念連合の法則はかうした必然の過程によつて次第に高級の快楽を生み出し、やがては人を導いて窮極的な精神的幸福感に達せしめる、と云ふのである。

以上の概略的な紹介によつてもわかるやうに、ハートレーもヂョン・ロック以来の経験主義の立場に立つて、あらゆる心理現象を感覚から導き出してゐるのであるが、ハートレーはヒュームよりも更に徹底した自然科学的な機械的必然論を心理現象に適用してゐるのである。ハートレーは、丁度ニュートンが引力を以て万物の運動を説明し得たやうに、観念連合の法則を以て人間一切の心理現象を説明し得ると考へた。そして道徳観念や、神への愛の如き高度に洗練された観念の発生すら、観念連合の法則によつて導き出さうとしたのである。ハートレーによれば、神は人間がさういふ機械的、必然的な過程をたどつて至福の観念に達するやうに仕組んでゐる、と云ふのである。曰く、「歴史から察するに、神は

そのやうに世界を作り給うてゐるやうに思はれる。神は恐らく神自らの道徳的完璧さの故に、そのやうに作らざるを得なかつたのである――徳には好ましく、快い観念がともなひ、悪行にはいまはしい観念がともなふと云つた工合に。従つて道徳観念は必然的、機械的に発生するものである。」(16)

われわれはかかるハートレーの説に、唯物主義と神学とのまことに奇妙な結合を認める。レズリー・スティーヴンが指摘してゐる通り、ハートレーの展開してゐるやうな唯物主義的な心理学を、その正当な論理的帰結に導くならば、ヂェイムズ・ミルの説く無神論のやうなものが生れ出たであらう。

さて以上のやうなディヴィド・ハートレーの学説によつて代表される英国の経験主義的心理学は、ワーヅワースの思想に甚大な影響を及ぼし、彼の哲学の基礎をなしてゐるといふのがアーサー・ビーティーの説くところであるが、それはどの程度に認容出来る主張であらうか。

この問題に立ち入るに先立つて、先づワーヅワースがハートレーの哲学に親しんでゐた外的証左の有無について考へて見たい。

ワーヅワースがハートレーを知る機縁を生んだものとして先づ考へられることは、ワーヅワースが一七九三年から九四年頃にかけての青年時代に、一時無政府主義者ウィリアム・ゴドウィンの思想に心酔してゐたことである。ところがゴドウィンが一七九三年に出版した有名な「政治的正義」の第一版で展開してゐる人間心理の考察は、ハートレーの心理学説の忠実な紹介であつて、その第四巻第七章の「人間の心理の機構について」と題する章には、ゴドウィン自身がわざわざ註の中で「以上がハートレーの仮説の可なり正確な記述であることがわかるであらう」と断つてゐる位である。従つてワーヅワースがその青年時代（一七九三―九四年）にゴドウィンの著書を通じて間接にハートレーの心理学説を知り、ハートレーの名を知つたことは先づ疑ひない。また、ワーヅワースがゴドウィンの学説を全面的に受入れてゐた一時期があることは、ワーヅワースに関する従来の研究によつて今日一般に認められてゐる事実であるから、この時期にゴドウィンの著書に説かれてゐるハートレー流の心理学説にワーヅワースが可なりの程度に深入りしてゐたと云ふ推測も一応は成立つであらう。しかし、一七九五年頃から以後、ワーヅワースは急速にゴドウィンの影響から離脱して行つた。いや、一七九七年以後目覚ましい展開を見せたワーヅワースの詩と思想は、ゴドウィンの理性万能的な考へからの完全な解放の上に築かれて行つたのである。このやうに考へるとき、かりに一歩を譲つて一時はハートレーの説に深い影響を受けたとしても、一七九七年以後のワーヅワースの思想に、ハートレーの説くやうな機械論的な心理学説がどれ程大きな役割を果してゐるか、甚だ疑問と云はねばならない。

ワーヅワースがハートレーの説に親しむいま一つの機縁として想像されるものは、ワーヅワースのゴドウィン思想心酔時代よりは少し後れて、一七九七年の春頃から、彼がサミュエル・テイラー・コウルリッヂと親しい交際をするやうになつたことである。

コウルリッヂは若い時分から哲学に非常な興味を覚え、いろんな哲学書に読み耽つてゐたが、ワーヅワースとの交際のはじまる以前から、ヂョン・ロックにはじまる英国哲学、ことにハートレーの哲学に非常な興味と尊敬を寄せてゐた。一七九四年十一月六

日附でヂョーヂ・コウルリッヂに与へた手紙の中には、「人間の性質について極めて賢明に書いてゐるロック、ハートレー其他の人々」と云つた言葉が見えるし、一七九四年十二月十一日の消印のあるロバト・サウジー宛の手紙の中では、「私は完全な必然論者です――そしてこの主題を始んどハートレー自身と同じ位によく理解してゐます」と云つている。一七九六年九月十六日にコウルリッヂは長男を儲けたが、当時彼はまだハートレー熱に浮かされてゐたと見えて、この息子に自分の私淑する哲学者の名ディヴィド・ハートレーを洗礼名として与へてゐる。しかしコウルリッヂは一八〇一年頃から漸くヂョン・ロック流の哲学に飽き足らぬものを感じはじめ、やがてハートレーの観念連合説や必然論を放棄するやうになつて行つたのである。したがつて、一七九七年の春以降、ワーヅワースとコウルリッヂの親しい交際のはじまつた頃、ワーヅワースがコウルリッヂの口からハートレーの哲学の内容を聞かされ、それが両人の間の話題となつたこと、またそれが当時まさに醱酵期にあつたワーヅワースの思想の形成に何等かの刺激を与へたであらうことは一応推測し得られる。しかしこの際ワーヅワースが、コウルリッヂのやうな手放しのハートレー礼讃に無条件の賛意を表したかどうかは疑問である。またワーヅワースがコウルリッヂの手引によつて直接にハートレーの著書を手にする機会を持つたかどうかも今日のところ明らかでない。と云ふのは、ワーヅワース自身が直接ハートレーについて書き残してゐる文書は始んど見当らないからである。僅かに一八〇八年九月二十七日附でリチャド・シャープに与へた手紙の中で「立派な力量を具へてゐても、時代よりも進んでゐたために、著作によつて自分の家族に利益を与へる望みを全く絶たれてゐる」人が世間にはゐることを語り、「例へば哲学ではハートレーの人間論のことを考へて御覧なさい。それは何といふ長年月、始んど完全な忘却のうちに眠つてゐたことでせう」(17)と書いてゐるのが見当る位のものである。これによつてワーヅワースが一八〇八年当時も、ハートレーの哲学に並々ならぬ尊敬を寄せてゐたことが推測される。しかしそれも、ワーヅワース自身が直接ハートレーの著書に親しんで得た感想であるか、それとも数年前、コウルリッヂがハートレーに傾倒してゐた時分に、コウルリッヂからその偉さを吹聴して聞かされたときの漠然たる印象でものを云つてゐるのか、はつきりしない。

要するに現在のところ、外的証左の上からは、ワーヅワースが直接にハートレーの著書に親しんだことを立証する確たる極め手は見つからないのである。

それではワーヅワースの書いた作品の中に、英国経験主義哲学、乃至はディヴィド・ハートレーの思想にもとづいたか、あるひはその影響を受けたと思へるものが、どの程度に見出されるであらうか。

アーサー・ビーティーが、ヂョン・ロックよりディヴィド・ハートレーにいたる英国経験主義哲学からワーヅワースの学び取つた最も重要で根本的な思想として挙げるものは「人間三時期説」"three ages of man"である。ビーティーの著書「ウイリアム・ワーヅワース――歴史的関連に於ける彼の学説と芸術」の第五章は、ワーズワースの「人間三時期説」の詳細な考証と解説である。

ビーティーに従へば、ワーヅワースにあつては理論は創作衝動に先行する。ワーヅワースが本当にワーヅワースらしい詩を書くやうになつたのは一七九七年以来のことであるが、これに先立つて彼は自然と人間と社会に関する彼独自の考へを完成してゐた。従つて一七九八年及びそれ以後の彼の詩は、すべて彼の一貫した理論の例証として書かれたものである。そしてこの理論の根幹をなすものが「人間三時期説」である……といふのがビーティーの所説である。

ビーティーは、ティンターン・アベイ・ラインズ」に始まつて、「序曲」の第一、第二巻、「エクスカーション」の第一巻、「霊魂不滅の賦」「序曲」の第八巻、散文「シントラの条約」「エクスカーション」の第四巻、雑誌「フレンド」への寄稿文等、ワーヅワース二十八才頃から晩年にかけてのさまざまな著作の中に「人間三時期説」が常に同一の形で展開されてゐることを詳説してゐる。ビーティーによれば、ワーヅワースはこの「人間三時期説」を常に不変、かつ整然たる形で説き、またこの理論が彼のあらゆる書きものの根底をなす考へのやうである。しかし実際にワーヅワースの著作にあたつて、ビーティーの所謂「人間三時期説」を仔細に検討するとき、われわれはさう容易にビーティーの見解にくみすることは出来ない。実はビーティーの挙げた先の各著作の間でも、この三時期説について種々の喰ひちがひや矛盾が見出される。また著作年代の違ひにしたがつて、この問題についてのワーヅワース自身の考へに推移の跡が見られるのである。

先づワーヅワースの「人間三時期説」がどういふ内容のものか、それを最も初期に、そして最も明確な形で説いてゐる「ティンターン・アベイ・ラインズ」を手がかりにして考へて見よう。

ワーヅワースはこの詩の中で、自分の幼少年時代、即ち第一期に於ける心の状態を回顧して、次のやうな言葉を吐いてゐる。

The coarser pleasures of my boyish days,
And their glad animal movements

（私の少年の日の粗野な楽しみと、心躍る動物的運動）

ワーヅワースのここに云ふ「少年の日」は、「序曲」では主として第一巻と第二巻のはじめに紹介されてゐる。彼はここで水泳とか、スケートとか、乗馬とか、ボート遊びをするとか、絶壁をよぢ、あるひはわなで鳥を捕るため山野を跋渉すると云つた、烈しい肉体の行使と精神の緊張をともなふ遊びにふけつた己れの少年時代の姿を描いてゐる。「粗野な楽しみと、心躍る動物的運動」がこれらを指してゐることは明らかである。しかしこのやうな幼少時代にあつても、時折「楯の閃めきのやうな」瞬間が彼を訪れ、彼をとり巻く自然が彼に意味深いことを語つた。それは時として、「序曲」第一巻三七二行以下に記されてゐる、アルズウォーター湖上のボート無断漕出しのときのやうな、異常に感銘深い自然の印象となつて、幼い彼の心をゆすぶるのであつた。しかしこの幼少年時代にあつては、自然の印象と感銘は何等かの事件を機縁として、時折偶然に彼の心を訪れたに過ぎない。彼の自然に対する反応は受動的、無反省的であり、自然は勿論彼の関心の中心を占めるに至らなかつた。当時の彼の心は遊戯によつて代表される、無心の状態にあつて、その能動的な方面は動物的な運動感覚の満足のうちに捌け口を見出してゐた。

ビーティーはワーヅワースのこの時期を特徴づけて、「人生に

於ける無反省の時期であり、経験と自然に対する意識的反応のないとき」(18) と云つてゐるが、尤もの見解といふべきであらう。しかし彼はまた他の箇所で、この時期を「感覚の時代」(19) "the age of sensation" と呼んでゐるが、これはいささか誤解をまねく恐れがある。といふのは、それは正確には the age of the sensation of animal movements と云はるべきであるからである。またこの場合の the age of sensation は先きのロックやハートレーの説に見られる、知識成立の秩序の一環としての sensation とは何の対応関係にも立ち得ない。といふのは、この時期が如何に「経験と自然に対する意識的反応のない」時期であるとは云へ、感覚よりも高次の、ハーレトーの所謂単純観念や複合観念と云つた心理現象はすでにこの時期の幼少年の心中に活発に働いてゐるからである。

次にワーヅワースは彼の青年時代、即ち第二の時期に於ける心の状態を描いて次のやうに云つてゐる。

…nature then…
To me was all in all…
…The sounding cataract
Haunted me like a passion: the tall rock,
The mountain, and the deep and gloomy wood,
Their colours and their forms, were then to me
An appetite; a feeling and a love,
That had no need of a remoter charm,
By thought supplied, nor any interest
Unborrowed from the eye.

(当時自然は……私にとつてすべてであつた。……鳴りひびく滝ツ瀬は情熱のやうに私につきまとつた。丈高い岩、山、深く暗い森、その色、形、は当時私にとつては欲求であり、感情であり、愛であつて、思想のもたらす間接の魅力も、視覚以外のものより来る興味も必要ではなかつた。)

ワーヅワースがここに描いてゐる心の状態が、実は彼の生涯に於ける極短期間に起つたことであつて、彼のなまの体験がこのやうな表現をとるまでには、回想裡に於ける経験の転化といふ複雑な屈曲の過程を経てゐることについては、すでに別の機会にのべた(20)。しかし、たとへその内容の中核をなすものが、この詩を執筆する五年前の夏、彼がワィ河畔に立つたときに味はつた一種特別の経験であるにせよ、それを彼の「青年時代」一般に通ずる特色としてここに述べてゐることは明らかである。ワーヅワースによればこの時期にあつては、彼は自然の形象が彼の心に印刻する強烈な印象を、意識して、自ら進んで求めあるいた。そこに見られるものは感覚への陶酔感である。そしてこの陶酔は、「あらゆる感覚のうち最も専制的な」視覚に集中されてゐた。即ち、第一期にあつては、肉体的な「動物的運動」の感覚の満足が関心の中心を占めてゐたのに対して、第二期にあつては彼の関心は自然に向ひ、より高等な視覚のもたらす感覚の満足に向けられたのである。この意味で、第一期が the age of the sensation of animal movements であるならば、この期は the age of the sensation of sight と呼んでよいであらう。かうした感覚の対象である自然を、自然の故に追ひ求める段階が第二期であつた。そして今や自然の形象は「欲求」の対象になると共に「感情」の

対象となり、「愛情」の対象となつた。即ち、「鳴りひびく滝つ瀬は情熱のやうにつきまとひ」とあるやうに、感覚の満足は「うづくやうな喜び」「目くらむばかりの恍惚感」、即ち強い情感によつて裏づけられてゐた。この意味で、ビーティーがこの時期を「情感の時期」the age of feeling (or of sentiment) と呼んでゐるのもあながち不当ではなからう。

ところで、かういふ時期はいつまでつづいたか。「ティンターン・アベイ・ラインズ」中に語るところによればそれは少くともワイ河を最初に訪れた時、即ち一七九三年夏までは続いた筈である。これについては「序曲」に述べるところも略、一致してゐる。即ちその第八巻四七五行以下で、第一時期から説き起して—

Nature herself was at this unripe time,
But secondary to my own pursuits
And animal activities, and all
Their trivial pleasures; and long afterwards
When these had died away, and Nature did
For her own sake become my joy, even then
And upwards through late youth, until not less
Than three and twenty summers had been told
Was man in my affections and regards
Subordinate to her; her awful forms
And viewless agencies; a passion she!
A rapture often, and immediate joy,
Ever at hand; he distant, but a grace
Occasional, an accidental thought,
His hour being not yet come.

（自然自体は、時の熟しないため、当時の私の営み、動物的な活動やそのもたらす些細な喜びに対して、従位を占めてゐた。そして、遙か後年になつて、これらが消え去り、自然そのものが私の喜びとなつたとき、また青春の晩期を経て、二十三度の夏を数へるやうになるまで、人間は私の愛情と尊敬の点では自然——自然のおごそかな形とその見えざる力——の次に位してゐた。自然は私の情熱であり、しばしば歓喜であり、常に身近にあるちかの喜びであつた。人間は距離を隔てて、時折魅力をなげかけ、折にふれて頭に浮ぶにすぎなかつた。人間の優位を占むべきときはまだ来なかつたのである。）

この記述によれば、第二期は二十三才の夏、即ち一七九三年夏までつづき、その間、自然はワーヅワースの関心の中心を占めてゐたことになる。ところがこの時期のうちには、実は人事への関心が圧倒的であつたフランス滞在期と、英国帰還当時の期間が含まれてゐる。明らかにここでは彼の三時期説は彼の生涯の事実と喰ひちがひを見せてゐるのである。

ワーヅワースは更に「ティンターン・アベイ・ラインズ」執筆当時、即ち壮年期に於ける自分の心の状態を次のやうに形容してゐる。

…that serene and blessed mood,
In which the affections gently lead us on,—
Until, the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood

Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul:
While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things.

（愛情におもむろに導かれて――遂にはこの肉身の息吹きも、血の脈動すらも始んど停止し、肉体は眠つて、われら一個の生ける魂と化し、調和の力と喜びの深い力によつて、眼はなごめられ、ものの生命を見透すに至る、かの清明浄福の境。）

ワーヅワースがここで、先きに青年期のものとして述べた心の状態を一歩越えた、一種の神秘的なヴィジョンに昇まつた心境を語つてゐることは確かである。しかし、この種のヴィジョンは、実は彼が壮年期に達してから初めて得たものでなく、彼が幼少年時代からしばしば経験してゐるものである。たとへば、「序曲」第二巻三六七行以下に、彼がホークスヘッドのグラマ・スクール在学時代に、ひとり早朝に起き出でて静かな山上から渓間を見下すやうなときに

…such a holy calm
Did overspread my soul, that I forgot
That I had bodily eyes, and what I saw
Appear'd like something in myself, a dream,
A prospect in my mind.

（かくも神々しい静けさが、私の魂に充ちわたつて、私は肉身の眼があることを忘れ、私の見るものが、私のうちなるもの、心の中の眺望のやうに思はれた。）

と語つてゐるが、これは、己れの肉体的存在が消失すると共に肉体の形骸を脱した己れの魂が、非実体化した外界の存在と融合し一体化するかのやうな明澄透徹した心境を描いてゐる点で、先きに引いた一節と極めて近似してゐることがわかる。であらう。只、彼の屢々出逢つたこの種の経験は一体どう云ふ意味を持つものか、彼自身にもはつきり把握しがたい要素を多分にもつてゐたのである。

しかし、すでに廿八才に達したワーヅワースは、それまでの人生経験によつて、次のことを知るやうになつた。第一に、自然から得たこの種の経験とその回想は、彼が年を経て営めるに至つたさまざまの人生苦を軽減してくれる、不思議な「なごめ和らげる力」を持つてゐるといふこと――

that blessed mood,
In which the burthen of the mystery,
In which the heavy and the weary weight
Of all this unintelligible world is lightened:

（神秘の重荷、この不可解な世界の堪えがたく、わづらはしい重荷が軽減される、あの浄福の境）

したがつて彼は、この経験に導かれて、自然を単に自然としてではなく、何等かの意味で、人間界の悩みに、なぐさめと浄化の光を与へてくれるものとして見るやうになつたのである。

I have learned
To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth; but hearing often-times

The still, sad music of humanity,
Nor harsh nor grating, though of ample power
To chasten and subdue.

（私は、思ひなき青春時とちがつて、屢々人間の奏でる静かなかなしい調べを耳にしながら、自然を眺めるやうになつた。その調べは人を浄化し、なごめる力は充分にありながら、耳障りでもなく、またきしりもしないのだ。）

そして彼はかういふ経験のよつて来る根元をさぐつて、自然と人間をひとしく支配する、或る無限にして普遍的な精神が、天地の一切のものの中に働いてゐることを、感得するに至つた。

I have felt
A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man:
A motion and a spirit, that impels
All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things.

（私は自分を高貴な思ひの喜びにゆすぶる或る存在を感じた。それは深くまざり合つた或るものについての崇高な知覚であつた。――その住処は日々の夕陽の光であり、まどかなる大洋と生ける大気であり、青空であり、また人の心のうちにあるもの、あらゆる思考する事物、あらゆる思想のあらゆる対象を押しすすめ、万物の一切を貫流する運動であり、精神であつた。）

彼は廿八才にして、漸くかかる明確な思想に到達したのであるが、このやうな、人のうちに働く精神と、自然のうちに働く力が同質のものであり、同一の不動の法則の下にあるといふ意識がはつきり彼の心の中に目覚めるやうになつたのは、それよりも五年まへ、即ち一七九三年の夏の終り頃のことであつた(22)。即ち、彼はそのとき夜中にウェイルズのスノウドン山上から、雲海の上に聳える周囲の山々の上に月が静かに照りわたり、雲海の中の深いさけ目を通して、遙か下から無数の流れの音が相合して一つの声になつて湧き上つて来る、壮厳無比の光景に接した。彼はその時の月影を「無窮に思ひをこらす偉大なる心」の象徴と観じ、自然のうちに磅礴して、眺めの全体を変へてしまふ件の力が、人間の高貴な魂の発揮する高邁な能力に一致することを悟つたのである。かう云つた考へが、ワーヅワースの場合、彼が目にする神秘的な自然の光景の感銘に即して直観的に感得せられ、決して抽象的な推理の過程を経て到達したものでないことは注目すべきであらう。

しかし、かやうな自覚に似た意識は、更に溯つて彼のケムブリッヂ在学時代の経験にも認めることが出来る。即ち彼は「序曲」第三巻一二四行以下にそのときのことを次の通りに語つてゐる。

To every natural form, rock, fruit or flower,
Even the loose stones that cover the high-way,
I gave a moral life, I saw them feel,
Or link'd them to some feeling: the great mass

Lay bedded in a quickening soul, and all
That I beheld respired with inward meaning.

（自然のあらゆる形、岩、果物、あるひは花に、否、大道を蔽うてちらばる小石にさへも、私は心的生命を賦与した。私はそれらが感じるのを知り、あるひはそれらを何かの感情に結びつけた。巨塊は激刺たる魂の中に埋まり、見るもののすべてが内面的な意味をたたへて息づいてゐた。）

更に溯れば、ホークスヘッド校在学時代の終り頃にも、彼は次のやうな経験をしてゐる。

…with bliss ineffable
I felt the sentiment of Being spread
O'er all that moves, and all that seemeth still,
O'er all, that, lost beyond the reach of thought
And human knowledge, to the human eye
Invisible, yet liveth to the heart,
O'er all that leaps, and runs, and shouts, and sings,
Or beats the gladsome air, o'er all that glides
Beneath the wave, yea, in the wave itself
And mighty depth of waters.
(Prelude Bk Ⅱ. 419—428)

（……言語に絶した至福の状態にあつて、私は存在の感情が、動く一切のもの、静止するが如き一切のもの、思想と人間知識の及ばぬ彼方にあつて人の眼には見えないが、心には生きてゐると感得される一切のもの、跳び、走り、叫び、歌ひ、喜びの空をはばたく一切のもの、波の下、否波そのものの中や、わたつみの底をすべり行く一切のものの上に、充ちひろがつてゐるのを感じた。）

かく見来るとき、ワーヅワースが彼の所謂壮年期に至つて到達した一種の汎神論は、実は彼が幼少期から屢々見舞はれて来た神秘的経験の指し示す自然の帰結であつたことがわかる。それはかかる経験に彼が幾度か見舞はれ、それを活々と回想にのぼせては反芻し、観想の対象とするうちに、ワーヅワースの心中に徐々に、そして自然に熟し来つた思想なのである。そしてかかる汎神論は、あくまでも、自然のもたらす具象的な感覚の世界の観想又は回想（彼は過去に接した感銘的な光景を非常に活々と心中に再現し得る非凡の能力にめぐまれてゐた）に即して得られたところに特色がある。彼が習慣的自己を脱却し、抽象的な思考の世界を棄てて、彼の所謂「壮大なる耳目の世界」に没入する機会を得たとき、日常の感覚世界がそのまま浄化されてここに、自他一如の赫奕たる浄光界が現出したのである。ウィリアム・ブレイクは、感覚の世界は無限への門であると云ふ意味のことを云つたが、これはワーヅワースにもそのままあてはまる言葉であらう。この意味で、ウィリアム・ギャロドがワーヅワースの思想を「感覚主義」sensationalism と呼んだのは当つてゐる。そしてこの意味からすれば、ワーヅワースは、幼少時から壮年期にいたるまで、終始一貫してキーツの所謂「感覚の世界」に住しその詩と思想は常に感覚の世界に根を下してゐたと云ひ得るであらう。

さてビーティーは、ワーヅワースが到達した壮年期又は第三時期を形容して「思想の時期」(23) と呼んでゐる。

ビーティーは云ふ。この時期を指して「思想の時期」と呼ぶ理

由はこの時期に至つてワーヅワースが「それのみが満足を与へるところの「思想」によつて、より深く、より深遠な人生観を持つに至つた」からである。そしてその思想とは「「人間」が宇宙の中心であり、「人間の心」は宇宙にゆきわたり、あらゆるものを貫流する「或るもの」の頂点を形成する」といふことを人に教へるのであると(24)。

ここで、ワーヅワースの「序曲」の一節に聴かう。

There are in our existence spots of time,
Which with distinct pre-eminence retain
A vivifying Virtue, whence.....our minds
.....
Are nourished and invisibly repair'd,
A virtue by which pleasure is enhanced
That penetrates, enables us to mount
When high, more high, and lifts us up when fallen.
Thes efficacious spirit chiefly lurks
Among those passages of life in which
We have had deepest feeling that the mind
Is lord and master, and that outward sense
Is but the obedient servant of her will.
Such moments worthy of all gratitude,
Are scatter'd everywhere, taking their date
From our first childhood: in our childhood even
Perhaps are most conspicuous.

Prelude Bk. XI, 258—277

（われわれの生涯の中には、特に目立つてわれわれを力づけてくれる霊能をいまだに持つ「時の諸点」がある。さういふ霊能によつてわれわれの心は養はれ、また知らずして癒されるのであるし、またかかる霊能によつて喜びは昂められてわれわれにゆきわたり、心が高揚してゐるときは更に高揚させ、心がふさいでゐるときはふるひ立たせてくれるのであるが。この効験あらたかな精神は人生の通路にひそんで、心こそ王者であり、外的な感覚は心の意志の忠実なしもべに過ぎないことをわれわれに衷心から確信づけてくれる。このやうな瞬間は全幅の感謝に価するが、それは人生行路の各所にちらばり、われわれの幼児時代のはじめにまでも溯る。いや、恐らくその幼児時代にこそ、それは最もあざやかなのである。）

かくして、ビーティーがワーヅワースの壮年期をして壮年期たらしめてゐると主張する「思想」なるものが、実は「幼児時代のはじめ」の経験に、少くとも潜在的な形で、存在してゐることがわかるであらう。このことは、これまで何度も触れて来たやうに、ワーヅワースの神秘的経験なるものが、彼の所謂三つの時期を通じて常に一貫して根本的に同一の内容と意味を持つことを物語るのであらう。そしてかかる神秘的経験が感覚的な面をもつと共に、そのうちに後年の彼の「深遠な人生観」となるべきものを少くとも潜在的にひそめてゐるといふ点から云へば、「第三時期」もビーティーの所謂「感覚の時期」と呼ばるべきものを持ち、また「第一時期」も「思想の時期」と呼ばるべきものを持つてゐると云へよう。

ここでもう一度、ワーヅワースが「ティンターン・アベイ・ライインズ」でしてゐる「人生の三時期」の区別をふりかへつて見たい。彼があの場合、この三つの時期に価値的な段階づけをしてゐるかのやうな印象を読者に与へることは否定出来ない。即ち、「物思ひなき」「粗野な快楽」を中心にしてゐた少年時代から、「自然がすべてで」あり、自然の形象が「欲求」と「感情」との対象となつた青年時代、感覚のもたらす以外の力を借りず、「思想」のもたらす魅力を全然欠いてゐた青年時代から、自然を人間に関係づけて見るやうになつた壮年期へと、彼の精神が段階的に、感情的により洗練され、思想的により成熟した状態に成長してゐるものとして書きあらはされてゐるのである。

ところでワーヅワースは「ティンターン・アベイ・ライインズ」を書いてから六年後に「霊魂不滅の賦」を書き上げたが、彼はこの詩の中で、自分の、否、人間一般の生涯に四時期を劃して語つてゐるのである。

彼は先づ幼児期を語つて曰く、

Not in entire forgetfulness,
And not in utter nakedness,
But trailing clouds of glory do we come
From God, who is our home:
Heaven lies about us in our infancy!

(全然忘れ去つたのではない、また全然丸はだかでもない、
栄光の雲をもすそにひきながら、我等はふるさとである神の
御許から来るのだ。われらの幼児の頃は、天は身近にある。)

かくワーヅワースはわれわれの幼児期を、最も神に近く、従つて最も理想に近い時代としてなつかしむ。(ちなみに、'A Study of Wordsworth' の著者 J・C・スミスはこの引用句の最初の四行を挙げて、人間の心は生誕時には白紙の状態にあるといふロックやハートレーの説をワーヅワースが支持しなかつた一例としてゐる[25]のは面白い見解である。)

それにつづく少年時代、青年時代及び壮年時代を歌つて——

Shades of the prison-house begin to close
Upon the growing Boy,
But He beholds the light, and whence it flows,
He sees it in his joy;
The Youth, who daily farther from the east
Must travel, still is Nature's Priest,
And by the vision splendid
Is on his way attended;
At length the Man perceives it die away,
And fade into the light of common day.

(牢獄の影が、伸び行く少年に迫りはじめる。しかし彼にはまだ光が見え、光のさし来る源が見える。彼はそれを己れの喜びのうちに見るのだ。青年は日毎に東から遠ざからねばならないが、いまだに自然の司祭であり、その行く道には素晴らしい幻影がともなふ。遂に壮年に至つて、その輝きが失せ、日常平凡の光になり終るのを見るのだ。)

ここにいふ幼児期と少年期が「ティンターン・アベイ・ライインズ」の第一期、青年期が第二期、壮年期が第三期に相当するのであらう。そしてここでも明らかに、価値の段階づけが行はれてゐ

るやうに見える。しかもそれは先きのそれとは逆であつて、人は成長するに従つて天上の輝きは失せ、理想の状態から遠ざかつて行くのである。しかしながら、ワーヅワースは壮年期にはかく失ひしものを歎くことなく、「残れるものに……人間的苦悩から湧き出る、心なごめる思ひに、死を超えた彼方を見る信仰に、明哲の心をもたらす年月に、ささへの力を見出すべき」であるといつてゐる。このところをビーティーは、「若い頃の瀧刺たる感覚も貴重ではあるが、成熟期の「明哲の心」を訪れる思ひはそれよりも遙かに貴重であるといふ考へ」をのべてゐると解してゐる(26)が、これは賛成し難い。このやうな解釈は、恐らく、この詩に於けるワーヅワースの壮年期についての考へを、「ティンターン・アベイ・ラインズ」に於ける壮年時についての考へと一致させようとして生れたものであらうが、さういふ解釈の出来難いことは、「霊魂不滅の賦」全篇の趣旨と、問題の章句の前後の文脈を検討すれば明らかである。「ティンターン・アベイ・ラインズ」執筆当時と、「霊魂不滅の賦」完成当時とでは、ワーヅワースの壮年期の見方に、明らかに相当のずれを見せてゐるのである。

それでは、二つの詩篇の間の、「人間の三時期」についてのこのやうな見方の相違はどのやうなところから生れたのであらうか。これには、今まで検討して来た彼の神秘的体験が大きな関係を持つてゐるやうに思はれる。先きにも述べたやうに、彼を見舞つた神秘的経験の性質そのものは、幼少年期、青年期、壮年期を通じて本質的には同一である。しかし壮年時にあつては、過去に得たこの種の幾多の経験の記憶が彼の心中に蓄積されて、彼の回想にのぼるたびに浄化を受け、また長い人生行路の途上になめたさまざまの人間的苦脳の裏付けを得て、以前には獲得出来なかつた深い意味内容を具へて来たのである。この観点からすれば、思想的には、壮年期はもつとも充実した、豊かな精神的内容を具へた時期といへるであらう。これが「ティンターン・アベイ・ラインズ」に見られるワーヅワースの壮年観である。

ところが、かういふ神秘的体験は、「時の諸点」'spots of time'の語にも察せられるやうに、常住彼を訪れるものではない。その訪れは風の去来の如く、彼の意志の左右し得るところではなかつた。そして彼自身の場合、それは幼少年時代にもつとも頻繁、かつ強烈であつて、青年期、壮年期と、長ずるにしたがつて、その訪れは間遠になり、そのもたらす「輝き」は光うすらいで行つた。もつとも「霊魂不滅の賦」の執筆をはじめた一八〇二年は、ワーヅワースとしては最もみのり多い年の一つであつて、外部からは彼の創作活動に何の衰へも察知出来ない。詩の素材となつた体験をとつて見ても、かの有名な水仙の詩を書くもとになつた出来事はこの年に起つたのであり、また「ヂェドバラの主婦とその夫」や「ハイランドの少女へ」執筆のもとになつた経験もその翌年一八〇三年にスコットランド旅行中に得たものである。そしてこれらはいづれもワーヅワースの所謂「時の諸点」のうちに数へられるべき出来事なのであつた。しかし先きのやうな、神秘的経験が彼から遠ざかり行く徴候は当時すでに彼自身に自覚されてゐたと思はれる。「序曲」第十一巻は、大体一八〇五年（即ち「霊魂不滅の賦」脱稿の一年後）に書かれたものであるが、その三三四―三四一行には次の記述が見える。

The days gone by

Come back upon me from the dawn almost
Of life: the hiding-places of my power
Seem open; I approach, and then they close;
I see by glimpses now; when age comes on,
May scarcely see at all, and I would give,
While yet we may, as far as words can give,
A substance and a life to what I feel:

（過ぎた日々は、殆んど人生のあけぼのの頃から私に戻つて来る。私の力の隠れ場は開放されてゐるやうに見えるが、私が近づくと閉ぢてしまふ。今ではちらりかいま見られるばかり。老齢が来れば殆んど見えなくなるだらう。だから、出来る間に、言葉で伝へ得る限り、私の感じてゐることに実体と生命を与へて置かう。）

彼が過去の「時の諸点」で経験したことは常に生々と彼の脳裡に再現して、彼の生命を新たにし、彼の詩作の原動力となつたのであるが、それが漸く彼の脳裡にさういふ作用を与へなくなつて来たのである。この変化がそのまま進行をつづけるならば、霊感を受けた詩人ワーヅワースとしての生涯に終止符を打つときが来るかも知れない。さうなれば、残余の彼の生涯はまことに索莫たるものであらう。しかも、そのやうな人生の実例を彼は当時身近に見てゐたのである。それは彼の親友サミュエル・テイラー・コウルリッヂである。当時彼は不健康と家庭の不和に悩み、そのために己れの詩的想像力の涸渇をなげいて、ワーヅワース達を憂慮させてゐた。このときのコウルリッヂの心境を詩に托したものが、一八〇二年四月四日に成るところの「失意の賦」の初稿である。

All this long Eve, so balmy and serene
Have I been gazing on the western sky
And its peculiar Tint of yellow Green—
And still I gaze—and with how blank an eye!
And those thin Clouds above, in flakes and bars,
.....
I see them all, so excellently fair!
I see, not feel, how beautiful they are.
My genial Spirits fail!

（快い、すみきつた、この長い夕、私は西空を、あの特有の黄がかつた緑の色を見つめてゐた。——今も見つめてゐる——がその眼の何とうつろなこと。点々とちらばり、棚引くあのうすい雲……それら一切の綺麗なさまが眼にうつる。美しい光景が、眼には映るが、感じることがない。私の詩心は尽きようとしてゐるのだ。）

この創造精神の衰頽の問題は、親友コウルリッヂだけにかかはる問題でなく、またワーヅワース自身をおびやかす問題でもあつた。ワーヅワースの「虹」の短章がかういふ状況の下に生れたのを知るとき、私はあのうちに、切ない祈りに似た、ワーヅワースの気持を感じ取るのである。

So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!

（私の生涯のはじめがさうだつた。大人の今もさうだ。老いてもさうでありたい。でなきや死んだがまし。）

そして、「靈魂不滅の賦」もまた同じ問題に対してワーヅワースの出した解答であつた。そしてワーヅワースの到達した結論は、小児のときにかいま見た天上の輝きの回想とそのもたらす信念こそは壯老年時代の精神生活の支へであると云ふ考へである。それは「序曲」第十一巻三二九―三三二行に述べてゐる考へと同じである。

Oh! mystery of Man, from what a depth
Proceed thy honours! I am lost, but see
In simple childhood something of the base
On which thy greatness stands,

（ああ、人間の不可思議さ。何といふ深みから御身のかがやきは出できたることか。見透しは仲々つかないが、私は無心の幼児期に御身の偉大さの礎となるものを認めるのだ。）

これが「靈魂不滅の賦」に於けるワーヅワースの壯年観である。この二種の壯年観は、一見非常なへだたりがあるやうに見えるが、今までして来たやうに、「序曲」の中の神秘的体験の記述とてらし合はせて考へるとき、そこにつながりのあること、またこの二者が調和出来ないものでないことがわかる。

以上われわれは、ワーヅワースの作品にあらはれたビーティーの所謂「人間三時期」説なるものを検討し、それが各作品の間に多少の異同があり、またそれ自体の中に矛盾があつて、決して整然と首尾一貫した形で説かれてはゐないことを知つた。そしてまた件の人間三時期説なるものは、幼少期から壯年期まで一貫してワーヅワースにもつとも重要な意味を持つ神秘的体験に関係させて、はじめてその意味もわかり、またその不整合の点や矛盾も説明出来ることを知つた。人間三時期説は要するに神秘的体験がワーヅワースの生涯に及ぼした影響を語らうとするに際して便宜的にとつたものであつて、それ自体は精密な心理発達史的検討に堪へるものではない。この説にあまりにこだはり、これをワーヅワース乃至人間一般の精神発達史の細部にわたつて厳密に適用しようとする試みは、かへつて混乱と真実の歪曲を引起すであらう。われわれはその実例をビーティーの先きの著書の各所に見出すのである。

われわれは人間三時期説を検討する途上で、自然のメッセーヂとしての神秘的経験がワーヅワースの生涯と詩を支へる重要な要素であることを知つたが、かういふ経験はヂョン・ロックやハートレーの哲学の対象になるであらうか。経験主義的であり、合理的なロックの哲学ではかう云つた経験はまともな考察の対象になつてゐないと云つてよからう。またハートレーによれば、自然の風景が人に快感を与へるのは、果物や花の快い味はひ、香、美しい色合とか、小鳥の歌などの連想が結びつくからである。あるひは風景の壯大さや新奇さが驚異や驚嘆の念をよび起して、それが殆んど苦痛の域にせまらんとする結果、大いに快感を昂めるためである。しかし、と彼は云ふ、人が自然の造り主たる神の力と、知識と、徳に対する崇高な観念とそれに相応する愛情をすでに形成してゐる場合には、件の神のつくり給うた自然に眺め入るとき、没我的な喜びの高揚を感じるであらう。さういふ喜びの幾分は、神への愛に結びついた喜びから来つたものである(27)と。即

ちハートレーにあつては、幾分でもワーヅワースの神秘的経験に似たものは、自然の創造主である神への愛という迂回路――彼にあつては、感覚的快楽の観念連合の法則による智的快楽への移行の過程に於て人間の達する最終の段階が神への愛なのである――を通つて漸く人間に達するのである。

さて、ここまで検討をすすめて来れば、ワーヅワースの人間三時期説とロックやハートレーの哲学との関係は自ら明らかであらう。筆者の見解を以てすれば、両者の間には何の関係もあり得ない。

ビーティーは云ふ。「ワーヅワースはハートレーの解説する三時期説 'the three ages' の重要さを確信してゐたに違ひない。といふのはこの三時期説を提示する形式はロックにはじまつてハートレーに至るまでの哲学に不断に繰返される伝統の頂点をなすものであつて、心理発達を提示する場合にとる不変の形式になつてゐるからである。これはロック、ハートレー、ヒュームを少しく検討すればわかることである。[28]」ところがここでビーティーがハートレーの「三時期説」というのは、先きに紹介した、ハートレーの説く心の発達の三段階、即ち知覚、単純観念、複合観念を意味するのである。ビーティーは更にロックについて云ふ。「ロックはあらゆる生得観念を否定して、あらゆる知識は感覚に起因し、感覚から吾人の観念はつくり上げられると説く。観念はその複雑さの段階に従つて三種類に分けられる。(一) 感覚の単純観念 (二) 反省の単純観念、及び (三) 複合観念。これはとりも直さず人間の三時期説 'the three ages of man' である。そしてロックの努力したところはワーヅワースの努力したところ――即ち人生の現実に適用してあやまりない真正の知識の概念に到達することであつた。[29]」

筆者にはビーティが、元々比較すべからざるものを比較してゐるやうに思はれる。先づビーティーは、ハートレーの感覚――単純観念――複合観念の区別、あるひはロックの観念三段階説を三時期説 the three ages 又は人間三時期説 the three ages of man と呼んでいるが、この呼び方は正直のところ、こじつけの感を免れない。といふのはハートレーもロックも一面ではこの秩序を人間の心理のたどる発達の段階としてゐるのであらうが、彼等のうちのいづれも、それを人間の生涯の三時期にあてはめてゐる事実はないからである。彼等の所謂複合観念は人間心理の高等な所産であらうが、既に幼児期に形成される観念であらう。尚この区別は他方では人間の知識を構造的に見た場合の複雑さの段階を示すものであるが、ワーヅワースの人間の三時期にはさういふ意味の秩序関係は見られない。ビーティはこれを「感覚の時期」「感情の時期」「思想の時期」と呼んだが、この感覚―感情―思想の段階は何等知識論的な立場に基づくものでなく、まつたく便宜的なものであることは、今までの検討で明らかにした。ロックの努力したところは「あやまりのない真正の知識の概念に到達すること」であらうが、人間の知識の起源と成立を考察し、観念の発達を論ずるのは、(「序曲」には多少これに触れたところもあるが) 詩人ワーヅワースの本来の目的ではない。ワーヅワースの人間三時期説とロックやハートレーの先きの分類と似かよふ点は、結局それが三段階に分れてゐるといふ点だけにしぼられるが、これも殆んど無意味のことである。ワーヅワースは必ずしも三段

階説を固執するものでなく、先きにも見たやうに「靈魂不滅の賦」では人間の生涯を四段階に分つてをり、またハートレーもある箇所では感覚一単純観念一複合観念の上に、超複合観念 (de-complex idea) を設けてゐる[30]からである。ワーヅワースの人間三時期説にロックやハートレーの英国経験主義哲学の伝統の影響を認めるのは、恐らくビーティーの思ひ過しであらう。

(未完)

註 (1) 本稿は筆者に交付された昭和十五年度及十六年度文部省科学研究費による成果の一部である。尚本稿を草するに際し長期間に亘つて Arthur Beatty: William Wordsworth 1922. の借覧をゆるされた東京大学文學部英文学研究室に厚く謝意を表したい。

(2) Leslie Stephen: Hours in a Library Vol Ⅱ, 1909, 'Wordsworth's Ethics.'

(3) A. C. Bradley: A Miscellany, 1929, 'English Poetry and German Philosophy in the Age of Wordsworth.'

(4) The Cambridge History of English Literature Vol. XI, Chap Ⅴ, p. 93.

(5) G. M. Harper: William Wordsworth, 1929, pp. 84—88

(6) Irving Babbitt: Rousseau and Romanticism, 1919, pp. 248—250

(7) C. H. Herford: The Age of Wordsworth, 1925, Introduction xvi p. 155 C. H. Herford: Wordsworth p. 44

(8) William Garrod: Wordsworth, 2nd. Ed., 1927, pp. 98—99

(9) Arthur Beatty: William Wordsworth—His Doctrine and Art in their Historical Relations, 1922, Part Ⅰ, Chap. Ⅰ, p. 15

(10) F. W. H. Myers: Wordsworth, 1881, p. 128

(11) C. F. E. Spurgeon: Mysticism in English Literature, 1913, Ⅲ. Nature Mystics, pp. 59—68.

(12) William Ralph Inge: Studies of English Mystics, 1906, Lecture V: The Mysticism of Wordsworth

(13) David Hume: A Treatise of Human Nature, Vol. Ⅰ, 1874, pp. 319—320

(14) David Hartley: Observations on Man, 1749, 1st Part, Chap. Ⅰ, Sect. Ⅱ, p. 75

(15) ibid. 1st Part, Chap. Ⅰ, Sect. Ⅱ, Prop. 14, p. 83

(16) ibid. 2nd Part, Conclusion, p. 504

(17) The Letters of William and Dorothy Wordsworth 1806—1811 ed. by E. de Selincourt, 1939, p. 242

(18) Arthur Beatty: William Wordsworth p. 66.

(19) ibid. p. 67

(20) 文学研究（九州文学会発行）第三十七輯掲載拙文「ワーヅワースのソールズベリーティンターン旅行」p. 83
文学研究第四十五輯掲載拙文「壮大なる耳目の世界」（上）p. 19

(21) Arthur Beatty: Wordsworth P.67

(22) 「序曲」の最終巻にのべられてゐるワーヅワースのスノウドン登山は一七九一年夏の出來事であつたといふ有力な説もあるが (R. D. Havens: The Mind of a Poet, Vol. Ⅱ, 1941, p. 607) ここでは Earnest de Selincourt に従つて一七九三年夏のこととして置く ('Prelude' ed. by E. de Selincourt, 1926, P. 599)

(23) Arthur Beatty: Wordsworth p. 67

(24) ibid. p. 66

(25) J. C. Smith: A Study of Wordsworth, 1946, p. 90

(26) Arthur Beatty: Wordsworth pp. 78—79

(27) David Hartley Observations on Man, 1st Part, Chap Ⅳ, Sect. Ⅰ, Prop. 94 p. 420

(28) Arthur Beatty: Wordsworth, p. 113

(29) idid, p. 113

(30) David Hartley: Observations on Man, Ist Part, Chap. Ⅰ, Sect. Ⅱ, Prop. 12, p. 79